



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第50回 日本語教育方法研究会 名古屋大学アジア法交流館（愛知県名古屋市） 2018年3月24日（土）

3月24日に名古屋大学法政国際教育協力研究センター、同国際言語センターと共催で第50回の研究会を開催いたします。今回はJLEMが誕生してから25周年記念研究会ということで、通常のポスター発表に加え、記念イベントを予定しております。これまでのJLEMを改めて振り返ると同時に、これからのJLEMについて参加者のみなさまと一しょに考え、新たな一歩を踏み出す機会としたいと思います。今回は79件と多くの発表が集まったため、以下のスケジュールのように通常のポスター発表を3セッション（1時間×3回）としました。もちろん昼食交流会も行います。一日を通して自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第50回研究会開催について

日時：	2018年3月24日（土）
会場：	名古屋大学
開催委員：	俵山雄司（名古屋大学） 小河原義朗（事務局：東北大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:30	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:40	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	2:30	ポスターセッション2開始
10:05	会の進め方の説明	3:30	ポスターセッション2終了
10:10	25周年イベント	3:45	ポスターセッション3開始
11:10	口頭発表開始	4:45	ポスターセッション3終了
11:40	ポスターセッション1開始	4:50	講評・JLEM賞発表
12:40	ポスターセッション1終了		次期会長挨拶
12:45	午後のポスター貼付 昼食交流会（～1:30）		次回開催委員挨拶
			閉会の挨拶
			参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入（p.19参照）にご協力ください。

新規入会：3,000円（年会費）

当日のみ参加：2,000円

【プログラム】

【第1セッション】

●口頭発表（2件）

1. 書く前に考えるための練習の実践—論理的な文章を書くために—

本間妙（中部大学）・山本裕子（愛知淑徳大学）・中林律子（東京福祉大学）

論理的で説得力のある文章を書くには、書く前に考えることが必要である。しかし実際には何をどのように考えたらよいのかわからず、書き易そうだからと漠然とテーマを選び、思いつきで書き進め、途中で行き詰まる学生が多い。筆者らは学部留学生に対し、論理的な文章を書くための練習として、主張を支えるため「適切な事例を考える」、「根拠を複数挙げる」、主張を補強するため「別の視点からの意見を想定し、それを否定する」、論点を明確にするため「定義・範囲を設定する」の4つを行った。その結果、学生らは事例や根拠の選定や、論じる上で必要な要件などを意識するようになり、先を見通してテーマを吟味するようになったことが窺えた。

2. 自然会話の特徴への気づきに効果的な提示方法の研究—中上級とゼロ初級の各レベルの学習者の対比から— 関崎博紀（筑波大学）

本研究では、日本語教育の現場で自然な会話を教材とするにあたり、学習者が、会話の諸特徴に気づくのに適切な提示方法を解明する。提示方法は、会話ビデオの単純な視聴、ビデオ+文字化資料、ビデオ+注目箇所の指示という3種に大別される。本発表では、中上級レベルの学習者は、単純視聴では話題に注目する傾向があること、指示をすると既習の文法や語彙の用いられ方、語形の変化などの発話の細部にも気づくこと、その一方で、ゼロ初級の学習者も、文字化資料を見れば既習の表現に気づくこと、また、指示すれば、ジェスチャーや表情、体の動きなどの非言語情報や、話者交替や協同的な談話展開などの談話的特徴にも気づくことを示す。

●ポスター発表（上記2件を含む26件）

3. JF 日本語教育スタンダードに基づき「総合日本語」授業における新たな教授法の試み

劉琳（江蘇大学）

中国の大学では、「総合日本語」という授業は昔「日本語精読」と呼ばれ、学部生の大学四年間にわたって設けられた科目であり、中国の大学専攻日本語教育において重要な役割を果たしていると言える。しかし、従来の教師主導型の教授法は新時代に適応せず、学生たちの学習意欲はますます低下など、様々な問題を抱えている。本研究は、中国の新日本語教育指導要領では特に強調されているコミュニケーション能力の養成を目指し、JF 日本語教育スタンダードを「総合日本語」授業を導入し、学習者主導型授業へ転換するために、新しい教授法を模索しようとする。

4. アカデミック・ライティングにおける論証技術習得を目指した指導の実践—文レベルでの論理的つながりの意識化と明文化を中心に—

中村かおり（拓殖大学）・近藤裕子（大正大学）・向井留実子（東京大学）

アカデミック・ライティングにおいては、論理的なつながりを明確にすることが求められる。文章の構成や論展開だけでなく、文レベルでも相互に関連づけながら書かなければならない。しかし、その論証技術は現状では十分に指導されているとは言えない。そこで本発表では、文レベルでの論理的つながりの意識化と明文化を目指して行った指導の実践について報告し、その効果を学習者の産出物から検証する。実践は3種類の練習からなるが、練習段階が進むにつれ、文のつながりに意識が向き、つながりをより丁寧に書こうとしている様子が見えてきた。

5. 作業療法分野における専門日本語教育の試み—国家試験問題を対象としたテキストマイニング分析—

石井清志（国際医療福祉大学）・野村愛・奥村匡子・奥村恵子・加藤真美子（首都大学東京）

国際医療福祉大学は「国際性を目指した大学」を理念のひとつに掲げ、医師、看護師、リハビリテーション専門職等の養成を行っている。これまでも中国、韓国、台湾などから多くの留学生を受け入れているが、昨今では非漢字圏の学生も増加してきている。今回、非漢字圏の留学生への作業療法分野の専門日本語学習を想定し、国家試験問題を対象にテキストマイニングを行った。その結果、国家試験問題の傾向や頻出単語の把握がこれまで

よりも容易に示すことが出来る可能性が示唆されたので報告する。

6. ピア・ラーニングの改善点を探るー学習者のコメントからー

渡辺民江・上田美紀（中部大学）

上級日本語読解の授業にピア・ラーニングを取り入れ、読解文要約を課した。実践後に行ったアンケート調査では、学習者から概ね高い評価が得られた。具体的には、学習者が互い刺激し合い課題を遂行したこと、要約スキルに関する気づきがあったこと、教師が示した要約スキルが再確認されたこと等が示された。しかし、評価しつつも、個々のコメントには否定的なものも見られた。今後、ピア・ラーニングを進め、より効果的な実践を計画するにあたり、これらのコメントは改善点を示唆するものであると考えられる。本研究は、コメントを分析することにより、どのような改善が必要であるかを検討するものである。

7. 初級日本語学習者による学習ストラテジー使用の意識変容プロセスの分析

郭毓芳（逢甲大学）

本発表は初級日本語学習者を調査対象と設定し、彼らによる学習ストラテジー使用の状況とその使用の意識変容プロセスを解明することを目的とする。調査は、17名の学習者に対するインタビューを、M-GTAを用いて分析した。その結果、学習者らは【日本語を学習し始めた学習方法】を使用し、日本語に接するようになった。学習の途中には、【日本語学習上の前進と停滞】が起き、学習上の前進によって持続的な学習を促された学習者がいる一方、停滞という状況に陥った学習者も現われた。停滞という状況がきっかけで、学習者らは学習ストラテジーを使用することを通して【日本語学習上の突破】を果たしていた。

8. 日本語／中国語学習者間の遠隔交流実践における訂正フィードバック

守屋久美子（東京外国語大学大学院生）

本実践では日本語学習者と中国語学習者が相互に自身の母語を教え合うEタンドムを行った。学習者は中国語と日本語を用いてインターネット上でトピックに従って文字チャットによるやりとりを行い、その後交流内容を作文にし、相互に訂正を行った。実践の結果、学習者は相手の訂正フィードバックからよりよいフィードバック方法を学び実践していたことが明らかになった。また、作文を訂正し合う活動を行ったことで、文字チャット時にはエラーを気にせずやりとりを行うことができた。一方で、学習者は主にスマホを用いており、文字による交流は負担もあることが明らかとなった。

9. 文型の理解と産出のための「文法ドラマ」ー受身、使役、授受等の表現の状況を演じて考えるー

久野由宇子・田口香奈恵・上田安希子（東海大学）

「～される」「～させる」「～させられる」「～してもら」「～させてもら」等の文型は、一通り学習し終えても正確な理解や産出に結びつきにくい。そこで、寸劇を取り入れた総合復習活動「文法ドラマ」を提案する。本活動は、学習者グループに行方者側、受け手側の例文を与えてその状況が発生する場面を演じさせ、その寸劇を見た全員に元の例文を再現させることによって、状況と結びつけて文型の選択を考えさせるものである。レベルの異なるクラスで実施を重ねながら、どのような状況の与え方や役割の与え方がより理解や産出につながるか、改善を重ねている。学習者の反応から見えてきた可能性と、具体的な実施方法を紹介する。

10. 留学生に対する専門科目「簿記」履修のための学習支援ー専門用語の学習についてー

横山理恵子（名古屋経済大学）・栗木久美（名古屋大学大学院生）

名古屋経済大学では留学生も専門科目「簿記」の履修が必須となっている。簿記の専門講師によると、実際に履修するためには履修前の段階で専門用語が理解できる学力状態であることが望ましいとされている。しかし、「簿記」を履修するにあたって必要な専門用語はほとんどが漢字で構成されているため、特に非漢字圏の留学生にとっては語彙を理解するだけでも相当な負担である。本学では、専門科目の履修前に、簿記の専門用語習得を目指し日本語教師による学習支援を行っているが、本発表では、文字カードとQuizletを活用した支援授業の実践報告を行い、今後の課題について検討する。

11. 目標の可視化を目指した Can-do Statements チェックリスト型評価シートの一試案—初級クラスにおける形成的評価とフィードバック—

近藤行人・藤森秀美・田中典子・古本裕子（名古屋学院大学）

初級の日本語クラスで課毎に行うオーラルテストにおいて、効果的に形成的評価を行うことを目指して Can-do Statements チェックリスト型評価シートを開発した。この評価シートは、その課のタスク達成に関わる「内容」項目と、コミュニケーション言語能力に関わる「言語」項目に分けられ、項目をチェックすることで、タスクで要求される項目ができるかどうかを確認される。この評価シートの使用により、1. 予め評価項目を教師・学習者間で共有できる。2. 実施後、学習者は評価およびフィードバックの理解が容易になる。3. 学習者がテストタスクを準備するための目標を可視化し、学習の波及効果を高めることができる。本発表ではこの評価シートの特徴と開発経緯について報告する。

12. サイレントウェイの現代的意義—1 コマでできる仮名五十音の導入と発音指導—

泉水康子（早稲田大学）

サイレントウェイ（以下 SW）は語学教授法としてしばしば取り上げられながらも、その現代的な有用性についてはあまり語られていない。しかし、SW には、教師が学習の支援者に徹することにより学習者の能動性や創造性を引き出すという極めて現代的な側面があり、21 世紀の民主的な教育パラダイムを推進するにあたり、学べるものは少なくない。本発表では、SW の基本理念に則りつつも、より平易な仮名五十音の指導例や実践例を挙げ、短時間で習得が可能となる技法を示した。また、SW における筆者自身の学習体験を主観的に振り返り、SW で学習者に与えられる探索や試行錯誤の自由が、学習意識の高い学習主体の発現を促すと思われることにも触れた。

13. タスク活動におけるグループ内の話の進行役の重要性

駒田朋子・井手友里子（南山大学）・伊東克洋（東京外国語大学）

中上級日本語授業でタスク活動を行ったところ、このタスクを通じて文法や語句・表現がより多く改善されたグループと改善が少ないグループがあった。そこでそれぞれのグループの話し合いをコミュニケーション成否の観点から分析した。その結果、フィッツジェラルド(2010)の述べるコミュニケーション成功条件のうち「他の意見を受け入れ自分の意見を変えられる柔軟性」、「ことばのやりとりでお互いを包含しようとする姿勢」、「ユーモアを取り入れる態度」はどちらのグループにも見られたが、言語面での改善が少ないグループには「話の進行役」が存在しないことが確認され、タスク活動が学習者に成果をもたらすにはグループ内の話の進行役が重要であることが示された。

14. 生活者としての外国人のための熊本方言教材『話してみらんね さしより！熊本弁』の電子書籍版及びアプリ版の開発

大庭理恵子（熊本県立大学大学院生）

地方に在住する生活者としての外国人が、その地域社会に順応する助けになるよう、これまでに『話してみらんね さしより！熊本弁』の書籍版、電子書籍版を作成している。今回、既存の教材をより多くの人に、より簡単に使用してもらうことを目的とし、電子書籍版の改良と新たに独習用アプリ版を作成した。電子書籍版は、講義形式での使用を想定し、標準語の挿入や学習項目の配列、画面の見やすさやなどに改良を加えた。さらに、学習者が手軽に独習できる環境を提供するため、新たにアプリ版を追加した。このアプリ版には、熊本方言話者の発話を聞き内容を理解する、自分の発話を録音し熊本方言話者の音声と比較できる等の機能も搭載した。

15. 日本での滞在経験が漢字学習動機に変容をもたらすか

中川愛理（京都外国語大学大学院生）

漢字に苦手意識をもつ非漢字圏日本語学習者の中にも、留学やインターンシップを通して日本に滞在することで、確実に漢字を習得していく者がいる。では、「漢字を習得することが得意な学習者」と「漢字を習得することを苦手と感じる学習者」は何が相違するのだろうか。本研究では「学習者の日本滞在」に焦点をあて、非漢字圏日本語学習者が日本滞在前と滞在中、帰国後で使用する漢字学習ストラテジーと漢字に対する意識、漢字学習動機に変化があるのか、また、「漢字を習得することが得意な学習者」と「漢字を習得することを苦手と感じる

学習者」のプロセスにどのような違いがあるのかを、インタビュー調査によって明らかにした。

16. 日本語学習における『自分らしさ』の発見—ブラジル人学習者の語りから—

山方純子（神田外語大学大学院）・井上正子（芝浦工業大学）

言語学習に対する意識や学習開始のきっかけは、学習者によって多様である。幼少期に日本語を学び始め、現在も継続しているブラジル人学習者にインタビューし、彼女にとっての日本語学習の意味を探った。その語りから、日本語を手段として活用しようという目的だけでなく、その学習・使用そのものに価値を見出していることが示唆された。即ち、日本語を使用する社会・文化に親近感を抱き、その中の一員として日本語を学び、使うことで「自分らしさ」を確認し、アイデンティティを再構築していることが明らかにされた。同時に、常に自分自身や自分を取り巻く環境を冷静に客観視し、メタ分析する様子も窺えた。

17. メタ認知を活用した読解教材を用いた授業の試み—使用後の面接調査から得られた声—

藤田裕子・福島智子・鈴木理子・白頭宏美・三宅若菜・伊古田絵里（桜美林大学）

大学で学ぶ留学生の読解力向上のため、大学で用いられる専門書の文章を使用し、メタ認知を活用した読み方が段階的に練習できる読解教材を作成した。教材は10課で構成され、メタ認知の4つのプロセス（計画・モニター・問題解決・評価）に関わる読解ストラテジーが1課につき1つ学べるようになっている。この教材を日本語上級レベルの読解授業で使い、使用前後に日本語の文章の読み方について質問紙で尋ね、読み方の変化が大きかった学生と小さかった学生に面接調査を行った。その結果、前者ではストラテジーの使用によって苦手意識が克服できた、後者では自分なりの読み方が確立していたがストラテジーを意識するようになった、などの声を得た。

18. 「オンライン」の文章構造分析に基づく作文添削の意義—上級作文授業における作文添削を通して—

木戸光子（筑波大学）

本発表では、作文添削は学習者の作文の誤用を修正するだけでなく、授業と同時進行で、すなわち「オンライン」で作文の文章構造分析を行うことで学習者の作文力を把握する重要な役割があることを指摘する。作文添削は時間と労力の割には学習効果が低いと考えられているが、添削の観点や方法などを工夫することで、各学習者が抱える問題点を明らかにし、個々の学習者に対して的確な学習支援を行うことができる。上級作文授業では個々の学習者によって頻出する誤用が異なることが多く、学習者別の誤用への対応も重要だと考える。

19. 初級後半コース・コーディネーションにおける課題解決のための実態調査—自律性と多様性の両立を目指すために—

齋藤智美・佐野香織・鄭在喜・吉田好美（早稲田大学）

発表者所属校では、4技能を総合的に学ぶコースは6段階に分けられているが、プレイメントテストは無く、履修者自身で自律的にレベルを考え、コースを選択する仕組みである。今回取り上げる初級後半コースは従来、初級前半からの継続および中級前半への継続を念頭に設計されており、その履修者は初級前半の文型文法の既習者として捉えられがちであった。しかし履修実態を調査したところ、そのような履修者が多数派とは言えず、継続のあり方の多様性が明らかになった。日本語学習のアーティキュレーションには個々の学習者の自律性が望まれるが、本発表では、その自律性と多様な継続のあり方への支援も包括したコース設計を展望、検討する。

20. 文化理解と交流を目的とした教室外活動で学習者は何を学んだか—短期滞在日本語学習者を対象とした初級クラスでの実践—

古賀恵美（名古屋外国語大学）・今村弓子・岩田緑（フリーランス）・曾根由香里（国際観光専門学校）

発表者の所属機関では短期研修員を受け入れ、専門分野の研究を深める本研修につなげるための日本語予備教育を行っている。この予備教育では、研修受け入れ先や周囲の日本人と円滑にコミュニケーションができること、日本の習慣、日本人の価値観や考え方を知り、理解する姿勢を身につけることが求められているが、研修員の交流範囲は限定され、教室外での日本語の使用や、日本人との接触場面も少ないのが実状である。本発表では、文化理解と交流を目的とした教室外活動の実践を報告し、学習者への質問紙調査と研修関係者へのヒアリングから、学習者の学びと学習効果を考察し、改善点を検討する。

21. メール作成支援システム『花便り』の開発と運用実験

金庭久美子（立教大学）・川村よし子（東京国際大学）・橋本直幸（福岡女子大学）

本発表では、メール作成支援システム『花便り』の運用実験の結果を報告する。『花便り』は、タスクに従って学習者が作成したメール文に対し、読み手配慮の視点を含めて助言を行うシステムである。入力文に対し形態素解析を行い、「①文体リスト」「②タスクごとの誤用リスト」「③タスクごとの必要表現リスト」と照合する。その結果、誤用があれば指摘し、タスクに必要な表現がなければ助言を行う。学習者データを用いて運用実験を行ったところ、①の文体の誤りと③の必要な表現に関する助言は概ね想定通りの表示ができた。しかし、②の誤用については指摘できない箇所があった。今後②の誤用リストを充実させより有用なシステムにしていきたい。

22. シャドーイングプログラムを用いた自律発音練習の実践ー「イントネーション・アクセントの変化」を中心にー

鮮于媚（日本大学）

本発表では、中上級日本語学習者を対象とし、発音練習を試みた授業の結果を報告する。今回、実践授業では、シャドーイングのプログラムを用いた自律発音練習を試みた。本実践は、学習者が自らの練習方法を体得することを目指していたため、録音環境やプログラムに関する説明およびシャドーイングの練習の方法に関する説明を行ったものの、発音に関する明示的な指導は行わなかった。シャドーイングの課題の後半部になるにつれ、イントネーションとアクセントが自然になった聴覚印象が得られた。発表では、音声分析を行い、具体的にどのような変化があったのかについて報告する。

23. 多文化交流科目「文化としての日本マンガ」で留学生は何を学ぶのか

小林由子（北海道大学）

北海道大学では、留学生と日本人が日本語を使って共に学ぶ「多文化交流科目」を開講している。「文化としての日本マンガ」はその1つとして4期にわたり開講されてきた。留学生の日本語レベルは中級以上でありマンガに興味を持つ者が多く受講している。多文化交流科目は日本語学習を目的としてはいないが、留学生はグループディスカッション・課題・レポートなどで日本語を使用しタスクを達成しなければならない。内発的動機づけの観点から、この活動は留学生の日本語学習に影響を与えている可能性が高いと考えられる。そこで、本発表では、留学生の提出物やコメントの分析によって授業実践が日本語学習にどのように影響したかを明らかにする。

24. ゼミの口頭発表における数量的データ提示・解釈の表現ー工学系ゼミにおける日本人学生と留学生の比較ー
生天目知美（東京海洋大学）

本研究は、工学系ゼミ所属学生による口頭発表において、数量的データを提示・解釈する際に使用される日本語表現に注目し、日本人学生と留学生の特徴を比較・検討した。その結果、日本人学生と留学生はどちらもデータの提示・解釈に「[判明事項]が分かる/見られる」を多用していた。一方、[判明事項]自体の表現には、日本人学生がモダリティ表現や、因果関係を表す「NがNを/に招く/もたらす/つながる」などの「Nが動詞」型を使用していたのに対し、留学生はそういった主観的表現の使用が見られないという違いがあった。この結果から、特に主張に関連する解釈で使用可能な主観的表現も学習項目の1つとする必要性が示された。

25. 中国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の表現形式の分析

半沢千絵美（横浜国立大学）

中国語を母語とする日本語学習者（学部生・大学院生・交換留学生・研究生）20名に賛成・反対や解決方法を問う様々な質問をし、その回答の中から意見を述べる際の表現を抽出して分析をした。その結果、学部生や大学院生など普段から日本語を用いて意見交換をする立場である学習者でも緩和表現を伴わない「と思います」の使用が多く、主張の際の表現が限定されていることが明らかになった。聞き手を意識した意見陳述をするためには、多様な表現形式が使えるよう指導していくことが必要である。

26. 若者ことば指導と「若者ことばハンドブック」制作の実践報告

辻本桜子（立命館大学）

本研究は、方言、性差、若者ことばなど日本語のバリエーションのうち、若者ことばのみに焦点をあてた授業

の実践報告を行うものである。対象は 27 名の大学の正規留学生とし、学生はまず、日本人学生との会話や SNS から若者ことばの収集をし、その後、日本人学生へのインタビューを通して意味、使用例、使用場面、使用上の注意等の確認を行った。その結果をまとめ、プレゼンテーションをし、最後に、「若者ことばハンドブック」の制作を行った。本研究では、これら一連の若者ことばの指導実践と、ハンドブックの制作過程についての報告を行う。

【第2セッション】

●口頭発表（2件）

27. 日本語ボランティア養成講座における「音声」とは

高橋志野・築地伸美・菅野真紀子（愛媛大学）

地域日本語ボランティア養成講座では現在、音声に関する知識提供はほとんど行われていないが、筆者らは 2017 年度に、地域と大学の日本語ボランティアに対して音声に関する講座を実施した。アンケートやその後の意見交換の結果、日本語ボランティアは日本語学習者の発音について気になっているがどうしたらいいかわからず、それをはっきりさせたいと感じていることが判明した。また、日本語ボランティア養成講座で教えることは、いわゆる「音声学の教育」ではなく、まず必要なのは、日本語学習者の発音の事例を提示することや日本語学習者の発音に対するボランティアの許容度を高めることであるということが示唆された。

28. ベトナムの日本語教員志望大学生訪日研修における「日本語の教え方」の授業の実践

湯本かほり（国際交流基金）

2017 年 6 月～7 月（約 6 週間）、ベトナムの日本語教員志望の大学生に対する訪日研修において、日本語の運用力向上を目指した授業とあわせ、全 6 回の「日本語の教え方」の授業を連関させて行った。内容は①よい日本語の授業とは、②話す授業とは、③教科書『まるごと』体験、④評価とポートフォリオ、⑤ベトナムの教員参加者の授業への参加、⑥ティームティーチング体験である。研修後、参加者からは「教え方の知識を身につけることができた」「アルバイトで日本語を教える時に応用したい」などのコメントが得られた。一方で、今回の実践では、教授内容を是とする思考の画一化につながらないようにするための工夫の必要が課題として残った。

●ポスター発表（上記 2 件を含む 26 件）

29. 質問作りの手法を取り入れた読解授業

堀恵子（東洋大学）・大隅紀子（東京大学）・世良時子（成蹊大学）

質問作りの手法とは、ロスタインとサンタナ（2015）に基づき、「質問の焦点の提示→質問作りのルールの提示→質問作り→質問の改善→質問に優先順位を付ける→質問を使った教室活動を行う→振り返り」という 7 つのステップを通して、発散志向、収束志向、メタ認知志向を経験させるものである。読解授業に取り入れることで、①課題発見につながる思考のトレーニングが可能となり、②読解教材の語や表現を繰り返し使用することによる習得が促進され、③質問文が適切に産出できるようになり、④グループによる読解活動に積極的に参加する姿勢が生まれた、といった効果が見られた。発表では、異なる教育機関における中級の授業実践について述べる。

30. 日本語だからこそ表現できる私—中上級クラスにおけるデジタル・ストーリーテリング作成の試み—

内山喜代成（名古屋大学大学院生）

中上級の日本語クラスにおいて、デジタル・ストーリーテリング（DST）の作成を行った。学習者は自己内対話や他者とのやりとりを通して、伝えたい相手と表現したいテーマを具体化させ、外国語である日本語という特性を活かして、母語では改めて表す機会がなく、また、気恥ずかしく伝えにくいことを表現する DST を作成した。一連の活動は、学習者に外国語である「日本語だからこそ表現できる私」という自己を再認識するきっかけとなった。

31. 社会参加を目指したインターアクション教育の実践報告

村上智子（神田外語大学）

本発表は、神田外語大学留学生別科の日本語科目において行った、実際の日本語使用場面における言語運用能力の養成を目指したプロジェクト活動の実践を報告するものである。CEFR では行動中心の考え方から学習者を

「社会で行動する者 (social agents)」として社会に参加することを目指した課題の設定を提唱している。本実践では、学習者である留学生と活動に参加する日本語話者の両者が「社会で行動する者」として双方向的に学びを得ることを期待して実際の言語使用場面としての課題の設定を行った。学習者はどのような言語運用能力を伸ばしたのか、また、外国語教育という文脈の中で、社会参加を目指した活動が日本語話者にどのように貢献するかを報告する。

32. ある中国人留学生のレポートを書く力の変化ー引用の仕方に注目してー

数野恵理 (立教大学)

本発表では、大学の日本語上級の作文クラスにおけるレポート作成のための教材開発について報告するとともに、5つのレポート作成を通して、ある学生のレポートを書く力がどのように変化したかを分析する。分析対象は、初回のレポートにおいて、資料からの引用が多すぎて自身の意見がほとんど述べられていない、文脈と関連のない引用があり論の展開が不適切といった、内容・構成にかかわる問題が見られた学生のレポートである。この学生は中国出身の交換留学生で、中国語などでも引用の仕方について学んだ経験のない学生である。学期を通じてこの学生のレポートにどのような変化があったかを分析し、考察する。

33. 感情を利用した語彙記憶法の試み

二口和紀子 (開智国際大学)

感情は情報の弁別性を高め、精緻化を促す役割を持つ。本研究では、日本語の語彙を記憶する際に、語彙の意味と感情を結びつけることで記憶の定着に効果が有るか否かを検討した。参加者に未知語の語彙を①ポジティブ語彙 (いい意味の語彙、覚えたい語彙、必要な語彙など)、②ネガティブ語彙 (悪い意味の語彙、覚えるのが難しい語彙、使用頻度が低いと思う語彙など)、③ニュートラル語彙 (いい意味も悪い意味もない語彙、具体的なイメージが思い浮かばない語彙など) に選別させて、記憶し再生してもらった。その結果、ポジティブ語彙、ネガティブ語彙、ニュートラル語彙との間に優位な再生数の差はなかった。これより、参加者自身に語彙の意味と感情を結びつけさせることはイメージの有無、また、意味の良し悪しに関わらず、語彙の記憶を促進させる効果があると考えられる。

34. Extensive Reading 継続による読みの変化ー日本語中級学習者の注視データと発話内容をもとにー

鈴木美加・熊田道子 (東京外国語大学)

本研究では Extensive Reading の継続により、日本語中級学習者の読み方及び理解がどのように変わるのかを学習者の読解中の発話のデータ、注視時間と注視の多い箇所を分析し、検討した。その結果、①発話データから、開始期には語の意味など、個々の語についてのコメント中心で、終了期には1文以上のまとまりのある内容を対象にした推測や感想、自問自答が多いこと、②注視データからは文章のストーリーの読み取りのためにコントロールを行い、内容転換部分で遅く読む傾向も認められた。Extensive Reading を重ねるとともに、読みのコントロールを行い、内容理解や読み方の調整が可能になると推測される。

35. 類義語で形成されるコロケーションの理解と使い分けー中国語母語話者を対象としてー

大神智春 (九州大学)

近年、コロケーション習得メカニズムの解明が重要な課題の1つとなっている。大神 (2017) では、プロトタイプ理論及び概念形成理論 (田中・深谷 1998) を援用して、典型化 (プロトタイプ形成) と一般化 (多義性理解) の観点から多義語で形成されるコロケーションの習得における中間言語体系を明らかにした。本発表では概念形成理論のもう1つの作用である差異化 (類義性理解) の観点から調査を行い、中国で日本語を勉強する学習者が調査対象語 (多義動詞) 及びその類義語で形成されるコロケーションの使い分けをどの程度理解しているかを明らかにする。また、調査で得た結果を語彙教材開発や授業にどのように活用すべきか考察する。

36. “見せて伝える” 主体的な文法学習の一試案ー上級学習者におけるポスターセッションとドラマ制作を通してー

森川尚子 (早稲田大学)

上級学習者が、「話す」「書く」といった実際の運用場面において、それまでの文法学習の成果を思うように活

かせずに戸惑う状況は少なくない。そこで、学習者自身が、知っていながら使えない状況をより主体的に把握し、使えるようになるための文法学習への動機を促すため、それまでに学んだ機能語や文末表現をイラストや図でポスター上に表現したセッションや、運用場面を配したドラマ制作といった「見せて伝える活動」を軸としたプロジェクトワークを実施した。その結果、学習者の中で断片化されていた知識の整理と繋がり構築、運用に対する意識の強化が見られ、今後の文法学習の方向についていくつかの示唆が得られた。

37. 学部留学生の読書活動に関する調査報告

脇田里子（同志社大学）・村上康代（関西大学）

昨今、日本人大学生の読書離れが進んでいると言われている。しかし、勉学する上で、読む力が重要な位置を占めることは言うまでもない。本発表の目的は、従来、取り上げられることがほとんどなかった学部留学生の読書活動を明らかにすることである。そのために、アンケート調査を行い、その一部の学生に対してフォローアップ・インタビューを行った。1日の読書時間・テレビ視聴時間・インターネット利用時間、1か月に読む書籍・雑誌・マンガの冊数、読書の分野、電子書籍の利用などについて調査した。インタビューではどの言語で読書をするか、電子書籍の利用形態などを追加調査した。本発表ではこれらの結果とその課題を述べる。

38. ベトナム人留学生が学んだ文章の書き方ー母国の学校教育を通してー

瓦井由紀（名古屋大学）

ベトナム人大学院留学生7名にインタビューを行った。その目的は、彼らが母国での国語（中学校、高等学校では文学）教育を通してどのようなテキストスタイル、書き方を学んできたかを調査することである。その結果、ベトナムでは大学入学試験に、著名な小説や詩についての解釈文、評論文を書く問題が出題されており、それをいかにして上手く書くかが重要視されていることが分かった。また、留学生は、日越の論文の書き方に違いがあると感じ、日本では問題提起部分での問題の重要性とその詳細な説明が求められると考えていることが開示された。

39. ケアハウス職員の使用語彙調査

工藤昭子（東京福祉大学）

近年、介護分野では人材不足が深刻であり、外国人人材の登用が期待されている。しかし、「介護」の在留資格を得るためには介護福祉士資格取得が必要であり、介護分野の研究は国家試験のための研究が多くなっている。そのような中において、試験勉強に偏らない、現場ですぐ使える実践的な日本語教育の必要性が注目されている。本研究では、社会福祉施設の中でも、家庭での日常生活に近い環境で最低限の生活支援サービスをうけながら自立した生活をめざすケアハウスでの会話は、日常会話から福祉の専門的会話まで幅広いと考え、ケアハウスで働く職員の職場での語彙調査を行なった。その結果を報告する。

40. 理系専門用語の漢字練習帳ー教員からのフィードバックー

青木由香利・北村よう（東海大学）

筆者らは昨年度よりFileMakerを使用して、理系科目（数学・物理）の専門用語の漢字練習帳を開発している。本研究では、実際に漢字練習帳とキーワードテストを授業で使用した数学担当教員にアンケートを行なった。彼らは漢字練習帳の開発には携わっておらず、参考書として利用してもらった。今学期使用した中で、練習帳の語彙数や種類について、学生が実際にどのように使用していたか、などをヒアリングした。また、共同開発者である日本語教員は、日本語指導の点より、この漢字練習帳について具体的な意見を聞くとともに、キーワードテストの難易度や方法などについても、調査した。その結果と、それをもとに改善された、漢字練習帳改訂版(案)を本論文で述べる。

41. 日本語論文に対する効果的なネイティブチェックの試みー双方にとって持続する学びとするためにー

君村千尋（筑波大学大学院生）

日本語非母語話者が書いた日本語の文章に対するネイティブチェックに関して、書き手の留学生とチェックを行う日本語ネイティブの両者が持続的に学べる方略を検討する。書き手の意図を尊重し、かつチェックを効果的に行うための方法・種類をタイプ別に分類し、位置付けを行った。その結果、書き手の構文動機を確認しながら

行うことが重要であると示唆された。双方が納得し、単に「紙を直す」ことに留まらないネイティブチェックの方法について提案する。

42. マイナスの評価を表す形容詞の教え方について

加藤恵梨・藤田裕一郎（朝日大学）

初級・初中級レベルの学習者に「日本の生活はどうか」と聞くと、「日本の生活はつまらないです」と答えることがある。この発言に教師は「この学生は日本の生活になじんでいない」と心配するが、よく話を聞くとそれほど深刻ではなく、「日本の生活になれていない」といった意味で使っている場合が少なくない。このように、マイナスの評価を表す形容詞は使い方を誤ると聞き手に誤解を与える可能性が高い。本発表では「つまらない」と「おもしろくない」、「きらい」と「すきじゃない」のような、ある表現とその対義語の否定表現は意味が同じであるのかを分析し、マイナスの評価を表す形容詞を教える際に注意すべき点を示す。

43. 仮名学習とサバイバル会話の反転授業－パイロットコースからの考察－

松井一美・徳間晴美・鄭在喜（早稲田大学）

本研究は、仮名学習とサバイバル会話の反転授業科目のパイロットコースを実施し、参与観察、質問紙とインタビューによる調査を行ったものである。本科目では、仮名の手書き練習はせず、タイピングを学ぶが、この方針に賛成の意見が見られ、教室内でのタイピング練習は好評であった。そして、サバイバル会話については、実際に遭遇し得る場面を想定し、極力文法解説を控え、授業前の動画視聴を必須とした。その結果、場面や語彙を教室で導入する必要がなく、多くの練習が行え、動画画像をキューとする練習方法は、情報を視覚で捉え言語化するという実際の情報処理に近く、サバイバル会話の学習方法として有効であることが窺えた。

44. 学期当初にひらがな習得が困難だった学生の1学期間の学習状況

樋渡康敬・橋本洋輔（国際教養大学）

日本語ゼロ初級コースで、学習開始から6日目の時点でひらがなテストを行った。全体の平均点は88.7点だったが、50点に至らない学生が2名おり、時期の異なるサポートを教師から受けた。本研究では、それぞれの学生の状況がサポートを受ける前と後でどのように変わったのかを、インタビューや学習状況の観察、そして成績の推移を通して考察する。その結果、ひらがな習得が困難な学生の早期発見と個別のケアが、その後の学習状況の改善に大きく影響していることが推測された。また、このような学生たちへの対応が遅れることを防ぐために、システムティックな対応の仕方を構築する必要があると考えられた。

45. 先輩留学生の体験談を読む活動の実践研究－キャリア形成支援教育をめざして－

中井陽子・菅長理恵・渋谷博子（東京外国語大学）

中級レベルの日本語授業で自身のキャリア形成を考えることを目的に、先輩留学生の体験談を読む活動を行った。教材は2000～2012年に来日した留学生へのインタビュー調査を基に作成したもので、内容は大学や会社で直面する様々な困難やその対処方法である。学習者らは、これらの体験談を読むことで、将来直面するであろう困難点や対処方法について自身に引きつけて捉え、自身のキャリア形成を前向きに考える契機としていた。一方、先輩留学生の事例を過剰に受け止め恐れる者もいた。また、教材内容として様々な専門分野や場면을望む声も聞かれた。これらから、体験談の有効性と多様な体験談をバランスよく提供する必要性が明らかになった。

46. 日本語教科書における格助詞と複合連体助詞の使用実態－「カラ」と「カラノ」及び「デ」と「デノ」を中心に－

楊雯嬾（九州大学大学院生）

日本語の格助詞と複合連体助詞について、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、学習者では『YUK タグ付き中国人日本語学習者作文コーパス 2016』Ver. 6で観察された「カラ」と「カラノ」及び「デ」と「デノ」の混同現象があるだけでなく、「カラノ」と「ノ」及び「デノ」と「ノ」を混同する傾向も観察されている。そこで、本研究は日中で幅広く使用されている日本語教科書を対象にして、格助詞の「カラ」「デ」、複合連体助詞の「カラノ」「デノ」の使用実態を考察していく。それにより、中国人日本語学習者に対する格助詞と複合連体助詞に関する指導の改善方法を提言したい。

47. 介護の専門日本語研修における ICT 活用と課題

野村愛・奥村匡子・奥村恵子・加藤真実子（首都大学東京）・齊藤真美（国際交流基金）・石井清志（国際医療福祉大学）

発表者らは、EPA 介護福祉士候補者（以下候補者）を対象とした介護の専門日本語研修（以下、研修）を行っている。候補者は仕事と学習を両立しながら介護福祉士国家試験の合格を目指すため、自律学習支援が重要となる。そこで研修では ICT を活用し、教室外での自律学習支援を目指す試みを行った。ネット上にプラットフォームを構築して候補者のグループを作り、予習用語彙リストや復習用クイズ等を配信した。研修では全員参加型クイズや振り返りを行った。しかし、セキュリティ対策、サイトへの登録、ICT を活用した学習環境の創出、効果的な振り返りなど、多くの課題が残った。ICT を活用して効果的に学習支援をする方法について意見交換を行いたい。

48. 専門科目の知識を媒介させた日本語教育の実践—情報学を専攻する学習者に対する実践を一例に—

谷智子・高島美江・因麻衣子（東洋大学）

本発表では、情報学専攻の留学生（レベル：①入門・初級、②中・上級）に対する、情報系の専門知識と関連づけた日本語教育実践を紹介する。レベル①に関しては、子供向けのプログラミングの絵本を使用し、彼らの有する専門知識を媒介させ、言語知識（基礎文法や語彙、情報系専門用語）を「インプット」することを試みた。また、レベル②に関しては、専門の知識を媒介させ言語を「アウトプット」させる試みをした。具体的には、web サイト作成を通して、技術面・メディアリテラシーの知識を実際に使用する機会を与えた。この活動を通じて日本語で自己表現する機会を与えることができ、個々人の言語使用の幅を拡大することが可能になったといえる。

49. 中国語母語話者の「に」と「で」の学習ストラテジー

龐月婷（京都外国語大学大学院生）

第二言語としての日本語学習ストラテジーに関する多くの研究は日本語学習における漢字、語彙、聴解と格助詞選択のストラテジーなどに着目されたが、助詞の学習ストラテジーに関する研究が少ない現状である。筆者は中国語母語話者を対象とし、日本語学習過程には助詞「に」と「で」の誤用原因を明らかにした上で、学習ストラテジーの観点から日本在留の学習者と非在留の学習者を分け、助詞の習得結果、及びそれぞれの言語環境において日本語の習得過程で使用している学習ストラテジーの構造を t 検定と因子分析することにより、積極的な学習モチベーションに関する学習ストラテジーが日本語助詞の習得にプラス影響を与えていることを明らかにした。

50. 「やさしくな一れ」は学習者の読解に役立つのか—日本語学習者を対象にした運用実験の結果から—

八木真生・川村よし子（東京国際大学）

本発表では、やさしい日本語への自動書き換えシステム「やさしくな一れ」の運用実験とインタビューの結果を報告する。調査は、中級レベルの日本語学習者を対象に行った。調査の目的は、「やさしくな一れ」が学習者の読解の役に立つのか、学習者の評価を得ることにある。調査項目は次の通りである。(H)英語や母語の助けがなくても、やさしい日本語によって文が理解できたか、(H)文の書き換えとバルーンによる意味表示の併用は問題ないか、(H)書き換えが分かりにくい場合、どう対応したか。調査の結果、「やさしくな一れ」は文の理解に役立つものの、学習者によって文章の読み方は多様で、必要とされる読解支援の形も異なることが明らかになった。

51. 看護師の「申し送り」談話におけるコロケーションの分析

永井涼子（山口大学）

本発表では、事例研究として看護師による引き継ぎ談話「申し送り」における主なコロケーションを分析し、外国人看護師への日本語教育につながる基盤研究とすることを目指す。分析の結果、「点滴」「熱」といった患者の多くに共通して言及される内容において「02 が○リットルいってます」「熱発のほうは○度○分です」といったように、通常のコロケーション、あるいは国家試験に出てくる書きことばにはない、医療談話特有と思われるコロケーションがあることが明らかになった。

52. 『中級日本語』本文の視聴覚的教材化—OJAD によるアクセント・イントネーションパターンの描画と合成音声付与—

伊達宏子・伊東克洋（東京外国語大学）

東京外国語大学留学生日本語教育センター開発教材『中級日本語』の各課の本文に対し、オンラインアクセント辞書 OJAD を活用してアクセントとイントネーションのパターンを可視化し、さらに合成音声を付与することで、本文の音声的な情報を視聴覚的に確認できるようにした。それにより、学習者は日本語文の音声的特徴をより明示的に把握することができるようになり、音声学習・習得の大きな手助けになると考えられる。発表では、教材作成方法や試用における学習者の反応を紹介する。さらに、教材作成にかかる時間やコスト、OJAD 利用法を説明し、各所属機関で使用されている教材に合わせたオリジナルの音声教材が作成できることを示す。

【第3セッション】

●口頭発表（2件）

53. 留学生を活用した自治体事業に対する言語教育的アプローチの可能性

式部絢子（北海道大学）

国際化（観光化）が押し寄せる自治体（地域）にとって留学生は、「日本語が話せる外の目を持った人」として頼りになる人材である。異なる背景を持った他者が“日本語”を通してやり取りし、共通の課題を解決していく過程は、留学生のみならず地域住民にも得るものがあるのではないか。そこで本発表は発表者が関わった自治体の国際化事業から、事業に参加した住民への影響、変容の一端を明らかにする。そして、「ことばの市民」（細川 2012）という概念を以て言語教育的観点から自治体の事業にアプローチしていくことの可能性を考察する。

54. 上級レベルの総合日本語クラスにおける CLIL を取り入れた授業実践とその課題—地域の歴史遺産をテーマとした事例をもとに—

深川美帆・敷田紀子・苗田敏美（金沢大学）

上級レベルの総合日本語クラスの授業において、CLIL（内容言語統合型学習）を取り入れた授業の実践とその課題について発表する。日本国内の大学で学ぶ留学生を対象に、日本語力の向上と、留学先の地域および日本の江戸時代の科学技術と時代・社会背景について学ぶことを目的として、この土地で今も生きる歴史遺産「辰巳用水」を題材に、学期中の5回（1回90分）を使ってCLILを取り入れた日本語の授業を行った。学習内容立案・教材作成および授業実践を日本語教師と大学の専門分野の研究者らとの協同で行う意義と、CLIL の観点を取り入れた日本語の学習活動の成果と課題について述べる。

●ポスター発表（上記2件を含む27件）

55. 多文化教員のビリーフはどのように形成されるか

河野俊之（横浜国立大学）

発表者らは、多文化教員（多様な言語文化を背景とする児童・生徒の指導、支援、学習環境づくりに携わる人）のためのよりよい研修に関する研究を行っており、そのために、研修前後に教育に関するビリーフの変化を調査している。しかし、単発で時間も短く、座学を中心とした研修では必ずしも大きな変化が見られないこともある。そこで、現役の多文化教員のビリーフ調査及びインタビューを行い、ビリーフがどのように形成されるかを調査した。その結果、生活言語能力と学習言語能力の関係など、講義などの知識が先行するものもあるが、母語の重要性など、教育における実体験に基づくものが多いことが分かった。

56. 「自己点検」を組み込んだ問題解決型ディスカッションの試み—具体的かつ説得力のある提案を促進するために—

工藤嘉名子・大津友美（東京外国語大学）

問題解決型のディスカッションでは、問題状況から逸れた提案や具体性のない提案がなされることがある。その背景には、話し合いの際、話が噛み合わないまま提案を採用する、与えられた状況設定を考慮しているかどうかの点検がないなどの要因がある。本実践では、具体的で説得力のある提案を促進するための試みとして、成果発表の前に、①解決策は状況設定に見合った内容か、②グループの全員が説明できる内容かの2項目について、グループで点検する時間を設けた。その結果、どのグループも状況設定に見合った具体的な解決策を提案するこ

とができた。また、やりとりの分析から、自己点検の話し合いが課題遂行に有効に働いていることがうかがえた。

57. イメージ化を促す助詞の学習－教材のオンライン化を目指して－

家田章子（麗澤大学）・中村かおり（拓殖大学）

日本語の助詞は、日本語学習者にとって習得の難しい項目であり、中級以降になっても基本的な間違いがしばしば見られる。そのため、ネイティブの持つ感覚をイメージとして学習者に伝えることが助詞習得の助けになると考え、助詞のイメージ化を用いた助詞学習の実践を行った。しかし、1回の対面授業だけでは定着は難しく、また、中級レベル以降になると授業で助詞学習のために時間を割くことも困難になる。そこで、授業時間以外に学習者が自習することで助詞の習得の一助となるよう、オンライン教材の開発を試みた。本発表では作成したオンライン教材を具体的に提示し、イメージ化を促す助詞の学習をどのように進めていくかを検討する。

58. モンゴル人日本語学習者のオノマトペ習得における一考察－介護のオノマトペを中心に－

新村初美（東京福祉大学）・劉永亮（首都大学東京）

2017年11月に外国人技能実習制度枠の「介護」が施行された。今後は外国人介護従事者の増加に伴い、介護の現場に直結した日本語教育支援が求められる。介護の現場ではオノマトペが多用される。そこで新設「介護」枠による来日が予想されるモンゴル国で介護のオノマトペに焦点を当てた調査を行った。結果、特に体の症状を表すオノマトペに関しては、モンゴル人日本語講師であっても揺れや浅い理解が見られた。ヒアリングから、①日本語学習未習事項、②モンゴル語には介護用の言葉があまりないことが分かり、高度の類推力をもって意味の把握には限界があると導き出された。ここから、特に体の症状を表す介護のオノマトペを教える重要性が伺われた。

59. 点字使用の学習者を対象とした日本語能力試験「情報検索」問題の触読調査

浅野有里（日本国際教育支援協会）・藤田恵（立教大学）・河住有希子（日本工業大学）・北川幸子（神田外語大学）・秋元美晴（恵泉女学園大学）

本研究では、日本語能力試験読解科目の「情報検索」を用いて、点字で日本語を学ぶ学習者がチラシやパンフレット等の文書から必要な情報を探し出す過程を検証する。筆者らは、以前、点字使用の日本語母語話者に対して調査を行い、その際に点字は指先で読み進める触読という読み方をすることから、文書全体を俯瞰し、特定の情報を探し出すことは困難であるという仮説を立てていた。しかし、実際には文書を部分的に読み、不要な部分を読み飛ばすことが観察された。本研究では、日本語学習者に対して「情報検索」の触読調査を行い、読みの過程を日本語母語話者と比較する。さらに文書の中から必要な情報を探し出す読み方の指導方法を検討する。

60. 異なる職場間における教師の協働の振り返り

渋谷博子・伊達宏子（東京外国語大学）・清水由貴子（聖心女子大学）

以前同じ職場のプロジェクトメンバーであった教師3名は、1名が異なる職場へ移った後、協働での論文執筆を行った。その際、協働を円滑に進める上でお互いが考えていたことを分析することで協働の成功要因を探ろうと考え、協働による振り返りを行った。具体的には、2017年の3か月間の協働作業についてTPチャートを用いて振り返り、文字化データをSCATにより分析した。その結果以下の概念が明らかになった。「形にする」ことを目標に、作業中は「連絡して共有」「連携」「自己開示」に努め、「学び」による「達成感」が得られ、更なる「協働の発展」への意欲が見られた。また、振り返りの共有により「振り返りの意義」が確認された。

61. これからの短期留学プログラムの形－アンケートの結果から見えてきた課題と展望－

金蘭美・小川誉子美・半沢千絵美（横浜国立大学）

本発表では、2017年7月に実施した「YNU日本語・日本文化サマープログラム」について報告する。本プログラムでは来日の前に実施したプレースメントテストの結果および応募者の日本語学習歴、バックグラウンドなどを考慮し、初中級（9名）と上級（15名）の2つのクラスに分け、2週間にわたり、日本語の学習（90分×15コマ）および講義科目の受講、日本文化体験、進学相談などを実施した。プログラム終了後に実施したアンケートの結果から、ニーズやレベルの異なる参加者を対象とする場合、既存の語学学習を中心とするプログラムでは限界があること、講義やゼミへの参加や研究室訪問、院生との交流に関心を示す者も多かったことから、日本の

大学生生活体験プログラムに方向転換が必要であることがわかった。

62. 中級日本語クラスにおけるディクトグロスの実践－話し言葉から書き言葉へ－

武田知子（国際基督教大学）

ディクトグロスは、まとまりのある文章を聞き、書き取ったメモをもとに話の全体像をグループで復元するという活動で、4技能を統合して行える学習法である。その成果として、聴解力のみならず、文法能力、作文能力を伸ばすことが報告されており、効果の高い学習法と言える。元は英語教育で生まれた学習法で、日本語教育でも実践が行われるようになってきているが、その実践例は限られており、どのように授業に取り入れられるのかわかりにくいという状況がある。本発表では、話し言葉から書き言葉へ移行期である中級クラスにおいて、授業で学んだ文法表現を含む「だ・である体」の文章を作成し行ったディクトグロスの実践を報告する。

63. 学習者を知る指標としての「Can-do statements による自己評価」

鹿嶋彰（弘前大学）

Can-do statements（以下 Cds）による自己評価とは、能力記述文（以下 Cds 項目）を提示し、それに対して「できる」「できない」を自己評価により回答させるものである。Cds は妥当性の高い尺度（例：野口他 2007）であるという評価もあり、学習者が多様化している現在、学習者主導型評価の尺度としても用いられている。しかし一方、Cds による自己評価では、個人間の評価の「バラツキ」や、日本語能力が伸びているにもかかわらず、自己評価は下がるといった「ゆれ」も観察されている。本発表は、外国語としての日本語の学習者のデータを基に、Cds の自己評価に見られる「ゆれ」が学習者の質的変化を知る指標として利用できる可能性を考察しようとするものである。

64. 自ら作成した評価基準を用いて、学習者は自分たちをいかに評価したか－口頭発表クラスにおけるルーブリック作成の試み－

梶原彩子・内山喜代成（名古屋大学大学院生）

中級の口頭発表クラスにおいて、学習者自身がテーマに即した評価観点および良いパフォーマンスについて検討し、ルーブリックとして評価基準を記述した。その結果、目標及び目標達成に向け、何が自分に必要であるのかを認識した上で、準備を行い、発表に臨むことができた。また、自らが作成したルーブリックを用いて評価活動を行うことで、自身のパフォーマンスに責任が生まれ、モチベーションの向上につながることが示唆された。

65. 「やさしい日本語」による狂言の紹介－日本語学習者を対象とした冊子作成の試み－

植松容子・山本晶子（昭和女子大学）・五十里美歩・太田くるみ（昭和女子大学学部生）

日本の伝統芸能の中で、能や歌舞伎は留学生にもよく知られているが、狂言の認知度は低い。そこで、学生プロジェクトの一環として、留学生に狂言を紹介するための冊子作成を試みた。冊子の作成には「やさしい日本語」を使い、情報の見せ方を工夫した。作成後、3名の非漢字圏出身の日本語学習者を対象に、冊子に対する印象についてインタビューを行った。その結果、「狂言の基礎知識」と曲中の台詞を解説した「分かりにくい言葉の意味」の評価が高かった。前者は予想通りであったのに対し、後者は予想と異なる結果であった。本調査の結果から、古語であっても「言葉も理解したい」という欲求があることが示唆される。

66. 「私の国と文化を知ってもらおう」プロジェクトの実践－おすすめスポット・大衆文化・昔話から伝える私の国－

黒野敦子（愛知県立大学）

学術交流協定大学留学生に開講されている「プロジェクトワーク」の授業で、「私の国と文化を知ってもらおう」プロジェクトを行った。プロジェクトの目的を達成するために、1学期間に愛知県立大学の日本人学生と授業を履修していない留学生に対して発表を3回行った。1回目の発表テーマは「私の国のおすすめスポット」、2回目は「私の国の大衆文化」、3回目は「私の国の昔話」である。この授業実践の成果と今後の課題を、留学生が発表後に書いた「ふりかえりシート」と発表を聞いた日本人学生・留学生の「コメント」をもとに報告する。

67. 語句の使い方の指導のための問題作成の試みー「気にする」の指導をとおしてー

三好裕子（早稲田大学）

中級前半レベルのクラスを対象に、語句の使い方に関する問題を作成し、指導する試みを行った。対象語句の一つ「気にする」について指導の前後に学習者が作った文を分析すると、指導前は「心配する」等の類義表現との混同、「気にしている」とすべきところを「気にする」としたもののや、助詞の誤りが多く見られた。指導では、類義表現との使い分けと使用時の語形の理解を図るための短文の正誤判断問題と、助詞の空所補充問題をさせた。指導後の文では、誤りは減少したものの、助詞など指導した点の誤りが残存していた。また、「気になる」のほうが適切な文や不自然さを感じる文も多く、指導の難しさと改善すべき点が明らかになった。

68. 社会福祉学部に於ける外国人研究生への就労のための日本語指導実践ー現場に即した指導法の確立へ向けてー

萩原幸司・黒羽友子（東京福祉大学）

社会福祉を専攻する大学・専門学校では、高度人材として社会福祉に従事しうる外国人が多数養成されている。しかし社会福祉の現場では、言語的にも技術的にも、必ずしも高度ではない業務内容での労働力の需要が多い。本発表では先ず、問題意識を共有する社会福祉法人の全面協力の下、社会福祉施設での就労を希望している東京福祉大学社会福祉学部の外国人研究生に、進学指導とは異なる就労指導を日本語教育の観点から実践した経緯を報告する。次に、その指導の過程で明らかになった学習必要事項を分析することで、構想が浮かび上がって来た指導書の草案を提示し、業務内容に基づく体系的な指導法について議論したい。

69. 映画の時代背景から発展させた日本理解のための活動ー『ゴジラ』(1954)を動機付けとしてー

山崎智子（OLJ Language Academy）

日本の歴史・文化に触れたいという中上級レベルの学習者からの要望で、その多くの要素が導入できる映画『ゴジラ』(1954)を授業で取り上げた。到達目標は、今の日本がどのような戦後を迎えて成り立ったのか理解することである。そのために、劇中描かれている50年代の日本の政治・経済・社会・文化（主に生活面）について、分野ごとにグループ活動を行った。本発表では、学習者の知的な探求活動の一環として、生教材を活かした動機付けの有効性を考えていく。

70. 学習者からの質問時に見られる学習者と教師のインターアクションの方略

加藤伸彦（立命館大学）

学習者が語彙・文法に関し教師に質問をすることは、教授法・学習環境・学習者の能力を問わず一般的なことである。しかし、特に初級レベルにおいては目標言語の能力的制限があり、学習者が質問内容を適切な形で伝えられないため、教師から直ちに答えが提供されない場合も多い。その場合、複数の話者交代からなるやり取りを経ることで答えが提供される。本発表はそのやり取りの中で学習者と教師が用いる様々なインターアクションの方略を実例と共に報告するものである。

71. 日本語学校での時事授業における語彙学習からのアクティブラーニング実践報告ー『新・日本語分野別 重要単語 1500』を使ってー

林田なぎ（早稲田文化館日本語科）

主に大学、大学院への進学を目指す留学生のための予備教育機関としての役割が主である日本語学校では、試験対策のためのカリキュラムに偏重する傾向が見られる。学習者の日本語学習の目的は本来、日本語を使って何をするかという運用力、応用力を身に付けることであり、進学のためだけに必要なものではない。ここでは暗記など単調になりがちな語彙学習を日本事情を考える時事授業に発展させた。暗記はしたものの使い方のわからない語彙、辞書を引いて意味は分かるが実感として理解しにくい語彙を時事を学ぶ中で実体を持つ生きた語彙として理解し、考え、発表するという一つの流れの中で行う形式の授業を行った実践報告である。

72. 日本語学習者のコミュニティへの参加過程とその多様な学びー留学生活の「経験の質」の向上に向けてー

寅丸真澄（早稲田大学）

本発表では、日本語学習者に対して縦断的に実施したライフストーリー・インタビューの分析を通して、学習

者のコミュニティへの参加過程とそこでの多様な学びを報告する。留学生生活を有意義なものにするには、それが日本語学習や自己形成、将来のキャリアにつながる豊かな経験の場になることが重要である。特に、学内外のコミュニティに参加できるかどうかという問題は大きい。そこで、本発表では、学習者のコミュニティへの参加という観点から、留学生生活の経験の質を向上させる支援のあり方を検討する。

73. 学習者にとって難しいコロケーションとはーコロケーションの定着を促す e-learning システムの運用を通じてー

坂井美恵子・金森由美（大分大学）・中溝朋子（山口大学）

中上級の学習者を対象に、名詞と動詞のコロケーション習得のためのシステムを開発、運用してきた。本システムでは、採用した約 1400 組のコロケーション毎に、文中の名詞と組み合わせるべき助詞と動詞を選択する問題を出题した。本発表では問題毎の正答率から見えるコロケーションの特徴を明らかにする。正答率が低いものは、助詞の誤答のほか、コロケーションの意味が推測しにくい日本語独特の表現（「努力を重ねる、投資に回す」）、動詞の実質的な意味が薄れたもの（「説得に当たる」）等の特徴がある。現在は易しいものから難しいものへと学習できるよう正答率順に 10 段階に分けて出题しているが、各段階の問題数など学習者のフィードバックを踏まえ、さらに改善していく。

74. JSL 児童への初期日本語支援における書く活動の実践報告ー書く指導において支援者のスキファールディングが果たす役割ー

佐々木ちひろ（名古屋大学大学院生）

本発表は、JSL 児童への取り出しでの初期日本語支援における書く活動の実践報告である。JSL 児童が好まないことが多い書く活動に意欲的に取り組めるように、話しことばをリソースとして書く活動を促進することを試みた。お菓子のレシピを書く・自分の好きなものを書いて紹介する・絵日記を書く活動の中で、スキファールディングを行い発表者と子どもの対話を書く内容に反映させるように心がけた。その結果、発表者との対話を楽しみながら、積極的に活動に取り組む子どもの様子が観察された。発表では、実践の詳細とともに、スキファールディングとしての支援者と子どもの対話が子どもの書く活動の促進につながる可能性について論じる。

75. 聴解能力向上を目指した日本語授業の実践ーデジタルペンをを用いた振り返り活動ー

毛利貴美（早稲田大学）

これまでの聴解過程におけるストラテジーに関する研究では、「自己モニター」「精緻化」等のメタ認知ストラテジーの利用が効果的かつ重要であると報告されてきた (O' Malley et al. 1989, O' Malley & Chamot 1990)。そのため、発表者は学習者の聴解過程およびノートテイキングの過程をメタ的に振り返る活動を日本語授業に取り入れ、そのツールとしてデジタルペンを活用している。本発表では、このデジタルペンをを用いた教育実践の概要を報告し、学習者の振り返りシートからメタ認知ストラテジーの習得の可能性について探る。

76. 研究発表を行う学会・研究会の選択ーJLEM の活用法ー

中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・齊藤真美（国際交流基金）・布尾勝一郎（佐賀大学）・橋本洋輔（国際教養大学）・野村愛（首都大学東京）

学会、研究会での発表は研究成果を公表する一つの手段である。学会、研究会は、専門分野、発表形式、査読の有無、申込から発表までの期間などそれぞれ特徴がある。ひとつの研究はいくつもの側面を持っているが、そのうちのどの側面に焦点を当てるかによって、また、どのようなフィードバックを期待するかによって、ふさわしい発表の場が異なる。筆者の研究グループは、介護用語学習支援ウェブサイトの開発という研究テーマに関連して複数の学会や研究会で発表を行ってきたが、本稿は、それぞれの発表についてどのような観点で、その発表の場を選択してきたか、また、JLEM を発表の場としてどのように利用してきたかについて述べるものである。

77. 教師の指導力を高めるための教員研修

三宅祐司・久野おおる・中林律子・波村慎太郎（東京福祉大学）

東京福祉大学では、開設以来、効果的・効率的な教育実践ができるよう FD (Faculty Development) に取り組んでいる。今年度より、学生に対する教職員の指導力を高めるべく SD (Staff Development) を開始した。

これまで名古屋キャンパス留学生日本語別科でも、FDの一環として、授業見学に加え、春期・秋期の開講前と終講後に教員研修会を開き、単なる授業打ち合わせだけではなく、授業の進め方をテーマとし、改善に努めてきた。今年度秋期より、授業を録画し授業担当者が客観的に自身の授業を見られるようにした。本稿では、これまで当別科で実施してきた教員研修および授業録画による授業の変化や、授業担当者の客観的気づきについて考察する。

78. EPA 看護師候補者は国家試験受験への過程をどう捉えたのかー就労 2 年目のフィリピン人看護師候補者を中心にー

甲斐三五代（京都外国語大学大学院生）

2008 年から開始された EPA 経済連携協定(Economic Partnership Agreement)に基づいて来日している看護師候補者は、社会的・経済的な動機と国家試験合格という明確な目的を持って日本で就労している。しかしながら、その大多数は「国家試験合格」の壁に阻まれ帰国を余儀なくされている。そこで、本研究は、EPA 看護師候補者はどのように看護師国家試験受験に取り組んでいるのか。国家試験に至るまでの過程を明らかにすることで、日本での就労の中でさまざまな困難を抱える候補者にとってより効率的な国家試験対策は何か、学習支援に関わる者ができる有効な支援の方法は何かを提言するために研究を行った。

79. FileMaker Go を使った授業連絡の効率化

北村よう（東海大学）

チームティーチングにおいては、緊密な連絡が不可欠である。しかし、連絡のために長時間費やすのは望ましいことではない。そこで、筆者は FileMaker Go を使って、出欠・授業進度・小テスト・宿題などの情報を入力し、それらを簡単にメールで送信できるシステムを開発した。欠席、遅刻は iPad 上でチェックを入れておけばメールにその氏名が自動的に入力される。また、課ごとの文型一覧を作り、終わった項目をタップすれば、その文型を扱った日の日付が入力され、メールにその文型名が記載されるようにした。このシステムによって、授業連絡の時間が短縮され、文型のやり残しも防ぐことができるようになった。

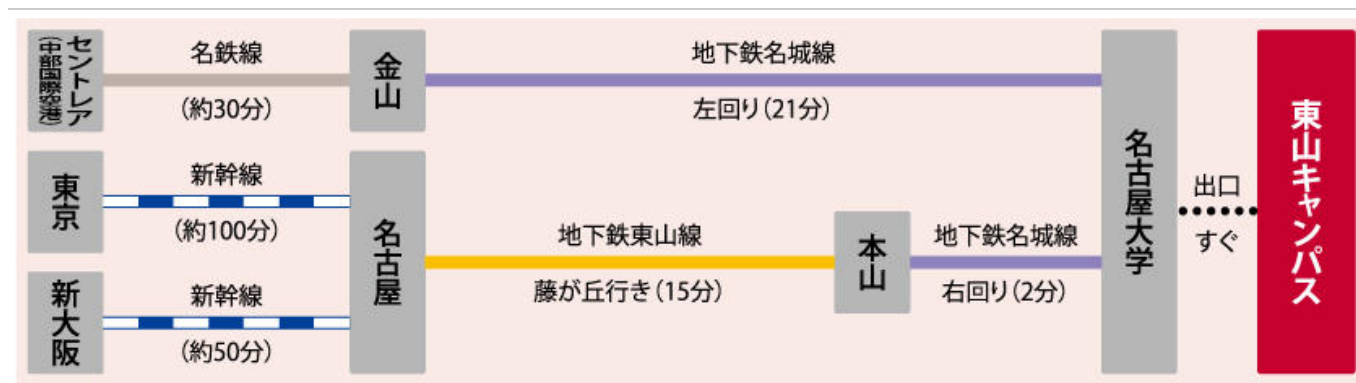
【会場案内】

名古屋大学法政国際教育協力研究センター（東山キャンパス）

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

<http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/about/access.html>

地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口下車すぐ



【地下鉄名古屋大学駅1番出口から法政国際教育協力研究センターまで】



昼食交流会会場
国際棟となり南部生協
「フレンドリー南部」

アジア法交流館
受付・口頭発表
ポスター発表
25周年イベント会場

【昼食交流会】

今回も午前のポスター発表終了後、南部生協食堂「フレンドリー南部」にて昼食交流会を行います。ぜひご参加ください。先着 120 名となりますので、お早めにお申し込みください。申込は当日受付にてお願いします。会費は 1000 円です。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2017 年度会費 (3,000 円) 未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#jlem-sg.org (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。

- 【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合
記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会
- (2) 銀行から振り込む場合
銀行名：ゆうちょ銀行
店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018
預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能
口座番号：6907651 口座名：日本語教育方法研究会

今回の第 50 回研究会は、2017 年度第 2 回の研究会となります。したがって、2017 年度会費を既に納入いただいている会員の方は会費の納入は不要になります。会場での会費の納入は基本的に受け付けておりませんので、2017 年度会費未納の方、今回新たに会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (上記参照) にご協力ください。